



雑草と戯れる

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 理事
腰岡 政二

一昨年(2020年)の12月末に中国で発生した新型コロナウイルス(Covid 19)は、瞬く間に世界を席卷した。わが国においては、発生後丸1年が経過したが、終息の兆しは未だ見えない。この中で、新型コロナは我々の生活のみならず生活様式にまで変化を与えた。私事ではあるが、勤務先の大学での卒業式、謝恩会に加えて、私自身の退職時最終講義、古稀の集いなど、多くの催しが中止あるいは先の見えない延期となった。この春に同様な事が繰り返される心配が、杞憂であることを願うばかりである。大学での講義はなくなったものの、都内での会議開催がかなりの数で予定されていた。その多くにおいて、Web会議の導入が試みられた。当初は、Webソフトの操作や発言タイミングなどのトラブルで、意思疎通に問題が生じるのではと感じたが、数をこなしていくうちに、Webでも十分に会議の目的が達成できることを認識した。何よりも、会議に関わる移動の手間と時間が減ったのは喜ばしい。半面、懇親会などで成り立っていた諸々の相談ができなくなったのが残念ではあるが、新型コロナが働き方の一部に変革を起こしたのは紛れもない事実である。

ところで、ウイルスは動物、植物さらには細菌の細胞にまで潜り込み増殖する。もっとも、植物ウイルスは動物に対しては影響を及ぼさないとされているが、農作物に対しては、茎葉の萎縮や生育抑制、果実変形などの様々な障害を誘発する。その一つに、チューリップ、ダリアなどの花色変異がある。まだウイルスの存在が知られていなかった17世紀中頃のオランダでの出来事であるが、ウイルスに感染したチューリップの花弁に現れたモザイク模様が、見た目にも美しく珍奇なものとして重宝され、そのような球根の価格が異常に高騰してバブル経済が発生した。一般的には、チューリップ狂時代として知られている。しかし、ウイルスに感染した作物の生産は容易ではなく、バブル経済は崩壊するのである。このように、農業生産においてもウイルスは重大な影響をもたらす元凶となる。植物ウイルスとして、わが国では200種以上が知られているが、その多くは、アブラムシ、アザミウマ、ヨコバイなどの昆虫により媒介される。ウイルス自体は、

圃場周辺の植物、多くは雑草を宿主として生存している。したがって、圃場へのウイルス感染を防ぐには、周辺に生息する宿主植物の除去や媒介昆虫の駆除が必須となる。

さて、わが家の庭にも毎年多くの雑草が芽吹く。しばらくは、手取りや刈り取りで対応するが、最盛期になると惨憺たる状況に陥る。もちろん、除草剤を利用すればよいのではあるが、野菜も花きも混植している場所では使いづらい。しかし、雑草に対する除草剤の特性や働きを十分に理解していれば、何らかの対策を打てたはずである。長年植物化学の研究に携わった者としての自負はどこにあるのか?と自問する。全くもって恥ずかしい限りである。そこで、改めて雑草と向き合うことにした。まずは、雑草生態そのものの観察から始める。庭に出現するのは、住み着いた多年生植物・球根類とその実生、周りから侵入する一年生植物、そして鳥に運ばれた花木類の実生である。これまでは、耕すことはあっても除草剤を使うことがなかった庭なので、それなりに雑草植生は豊かである。とりあえず、植調雑草大鑑を片手に雑草種の解明に取り掛かる。成熟すれば判別できる雑草種も、実生では判らないものが多い。特に、イネ科や球根植物は難しい。そこで、除草がてら、幾つかの草種を残すことにした。そうすると、雑草であっても日々の成長に愛着が湧いてくる。ある程度育つと種の判別は可能となるが、さらには、花を見なくなる。雑草の中にも美しい花は多くある。ここまできると、まさに雑草庭園である。とは言え、優占種になっても困るので、多年生植物や球根植物は丁寧に掘り取ることにする。雑草種の解明が進むと、次にそれらの生態について調べたい。と言うことで、まだ数年は、庭は雑草で覆われることになるであろう。幸い、我が家の住人も庭木・庭草もウイルスに感染した兆候はないが、いつの日にか雑草制御ができることを楽しみにして、今しばらくは雑草と戯れてみたい。